

氏名(本籍)	吉田 ゆか子 (岡山県)		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	博甲第6293号		
学位授与年月日	平成24年7月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	バリ島仮面舞踊劇トペンの人類学的研究 - 名人芸からネクサスへ -		
主査	筑波大学准教授	博士(文学)	山口 恵里子
副査	筑波大学教授	博士(文学)	武井 隆道
副査	筑波大学准教授	博士(哲学)	廣瀬 浩司
副査	国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授		関本 照夫

## 論文の内容の要旨

本研究は、インドネシア共和国バリ島の各種儀礼において上演される仮面舞踊劇トペンを研究対象とする。トペンに関する先行研究では、トペンを、巧みな話術を駆使する演者による名人芸として捉え、その名人による上演の分析が、バリ文化やコスモロジーとの関連をふまえて行われてきたが、本研究は、上演中や舞台裏でトペンに関わる様々なエージェント（人やモノの動きを媒介しながら働く行為体）のやりとりによって立ち上がる場としてトペンを描き直すことを目的とする。本研究により、語り手である演者中心的なトペン分析から脱却し、仮面やそれを作った職人、伴奏者、僧侶等の、演者と観客以外のエージェント、さらに上演の場を生み出す共同体にも目を向けることを可能にした。本論文は、エージェントと、エージェントを受け取る側のパーセプションが連なる関係性の束を人類学者 A. ジェルに倣い、ネクサスと呼ぶが、ジェルが芸術的なエージェントを問題にしてもっぱら「アート・ネクサス」を論じたのに対して、本論文は仮面とそれを取り囲む演者、仮面職人、伴奏家、僧侶らの間の様々なネクサスを分析対象とし、トペンを生み出すネクサスを明らかにした。

論文は全6章から構成される。第1章と第2章は演者と観客の間のネクサスを考察する。第1章は、演者たちがその時々の人々のニーズや演者たちの嗜好によって即興的に上演を行うなかでトペンに様々なジャンルが成立した過程を追跡した。その過程で、演者が「名人」だけではなく、内容上もコメディの要素が強調されるようになった一方で、会話劇としての要素が洗練されていき、こうした儀礼の機能以外の「余興」的な要素が儀礼のなかにとりこまれていく現象もみられるようになった。これはトペンのもつ即興性や柔軟性に、儀礼が呼応して生じた現象でもある。第2章は、このような儀礼的機能と余興の機能の両方を担うトペン・ワリの上演を、断片的かつ反復的に観賞する観客の振る舞いに着目した。トペン・ワリは、一度限りの上演として分析されるものではなく、断片が反復される総体として分析すべきものであり、またそのような上演は演者と観客コミュニティの持続的な関係性に支えられている。第3、4章では、「プロフェッショナル」な演者を取り上げた先行研究に対して、地縁者、血縁者、知人などから上演依頼を受けた無名の「ローカル」な演者に着目し、彼らが多様なエージェントとの関わりのなかで演者となるプロセスを明らかにした。第3章では、現在も増加を続ける「ローカル」な演者を取り巻くネクサスがダイナミックに変動している状

況も詳らかにされる。ローカルな演者が増加した主要因は、儀礼規模の拡大だが、その他、トペンの流行、学校教育等でのトペン演者を要請する行政の取り組み、トペンの知識の活字媒体による普及なども、トペンを多くの人々に開かれた芸能とした。このような状況下で登場した女性演者に着目したのが第4章である。女性演者の登場はバリ社会における女性の地位向上の現われとして議論されてきたが、本章は彼女たちとトペンの関係は一義的ではなく、外国人女性の活動を基点にした「グローバルなネクサス」と、トペン演者を父にもつバリ女性の演者の「ドメスティックなネクサス」が交錯するなかで多様なエージェントが作用し、その作用の場において、女性演者が仮面の使用や役の演じ分けなどを通して新たな表現を見出していることを論じている。第5、6章は、仮面を分析の中心にすえ、人とモノとの相関性を演者と仮面の濃密な関係性において問い直した。仮面劇では、人と仮面の境界が揺らぎ、主客が入れ替わりながら出来事が引き起こされる。そうした演者と仮面の間の主—客の関係がトペンではいかに攪乱されるのか、また仮面の物理的な「物」としての性質がトペンの表現や伝承にいかなる作用をもたらすのかという2点に焦点を当てて分析がすすめられる。第5章では、仮面、伴奏音楽の音、観客、そして上演の場や仮面のなかに宿る不可視の存在に導かれつつ行為するペーシェント／エージェントとしての演者に注目する。トペンの上演は、演者、仮面、観客、伴奏者、神格が互いに作用する、時に脆くもなる可変的なネクサスの場が可能とするものである。その場に、操り人形のようにもなる人間の身体の物性と、仮面の物性が多様なレベルで作用し、豊かなトペンの表現を生み出している。第6章では上演前後、つまり仮面制作の場や仮面が上演場から演者宅に持ち帰られた後に続く仮面と人との関係を考察した。仮面は繰り返し使用され、儀礼を施され、魅力や霊力を増してゆく。また、仮面は、贈与や相続により、前の所有者の意図や働きを次の所有者へと媒介する。このような仮面のもつ性質に、仮面職人や、材料となる霊力を帯びた樹木、仮面の額に埋め込まれた特別な石、演者の家族、僧侶等の多くの人やモノが関わり、さらに上演の場そのものの働きも加わり、仮面をめぐる様々なエージェンシーがトペン上演の場へと送り込まれる。

以上のように、トペンでは、演者は、仮面や伴奏者、観客に働きかけると同時に、彼らに働きかけられ、それぞれがエージェントとなり、ネクサスの場を生み出し、その場も上演中に様々に形を変える。この上演には、仮面職人や、過去の仮面の所有者、日々仮面に供物を捧げる家族など、上演の場には現れないが仮面を「育てる」ことに関わった者たちのエージェンシーも仮面を通じて作用している。トペンとは、このような作用を通して、過去の人々と仮面との関係を把持し、未来の上演や人々と仮面の関わりをも期待する営みだといえる。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

トペンに関する先行研究が、有名な演者やトペンの語り特性に焦点を当て、トペンが発する文化的、社会的なメッセージに着目してきたのに対して、本研究は上演中や舞台裏で働くエージェントのやりとりによって立ち上がる場としてトペンを描き直し、演者もジャンルも多様化するトペンの全貌を初めて明らかにした。トペンをバリ島における通時的、伝統的な芸能としてではなく、トペンという現象をバリの村のコミュニティ、インドネシアの情勢、さらにはグローバリゼーションのなかに位置づけて分析した点は画期的である。従来の研究が示してきた完成度の高い話芸としてのトペン・ワリ像に対する問い直しからはじまった本研究は、長期にわたる綿密なフィールドワークを経て、即興的であり、可変的であり、多義的でもあるという新たなトペン像を現すことに成功した。これにより、上演を出現させる多様な社会的、物質的フィールドにトペン舞踊劇が位置づけられ、トペン研究は従来の「バリ芸能論」という限定された場から、人文・社会科学の議論の場に呼び込まれたと言える。さらに、トペン上演を演者と観客という狭い近代演劇論の見方から解放し、個々人、集団、モノとしての仮面など多様なエージェントが絡み合う社会的、物質的文脈から捉

え直した視点は、トペン論としてもパフォーマンス・アート論としてもオリジナルで説得力に富むものである。エージェントとペーシェントのネクサスとしてトペンを分析するという視点を著者に提供したのは、A. ジェルのアート・ネクサス論である。だが、本論文は、そのネクサスのなかに不連続性や誤解、訂正、更新が含まれることを呈示し、さらにそのネクサスが日常的な場、芸能の場、儀礼の場を結び、重層的な、動的な場を生成することを指摘した。この指摘によって、ジェルのネクサス論が一様なレベルだけではなく、複層的なレベルで展開される可能性が開かれることとなった。

質疑応答ではまず、本論文のこのジェルの論に対する位置づけが問われた。芸能研究では研究対象とするネクサスは、ジェルが論じたアート・ネクサスよりも、広範になり、流動的になる。そのため、様々な関係性が見えにくくなるが、それでもなおジェルの論を参照する有用性と、その論への批判を明示する必要性が指摘された。本論文の独創的なトペンに関するアプローチと議論は、他の文化圏にもその議論を波及しうる、文化の創造の場に関して重要な問題を提起しており、その考察を深化させるための視野（たとえば仮面自体の美学やバリの身体意識等に対する議論等）と記述の力が期待される。これらの指摘は、本論文がトペン研究を、バリ芸能論を超えて、人文・社会科学の議論の場に呼び込んだがゆえに見えてきた課題を示したものである。今後、その場で、著者が、トペンのみならずバリの種々の仮面舞踊劇、さらにはバリ以外の仮面舞踊劇に関して研究をいっそう進め、議論を触発してくれることを期待する。

平成 24 年 5 月 30 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。